国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈共同研究プロジェクト紹介〉節連接へのモーダル的・発話行為的な制限 節連接の五段階

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2015-10-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 角田, 太作, TSUNODA, Tasaku
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000690

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics

国語研プロジェクトレビュー　NINJAL Project Review
No. 7 pp. 13–21 (February 2012)

〈共同研究プロジェクト紹介〉

節連接へのモーダル的・発話行為的な制限

節連接の五段階

Five Levels in Clause Linkage

角田　太作（TSUNODA Tasaku）

国立国語研究所　言語対照研究系　教授
（Professor, Department of Crosslinguistic Studies, NINJAL）

《要旨》 副詞節と主節の結びつきには制限がある。その意味的及び語用論的な性質によって，結びつきが可能であったり，不可能であったりする。副詞節と主節の結びつきの関係は，五つの種類に分けることができる。これを「節連接の五段階」と呼ぶ。本共同研究プロジェクトでは，日本語における節連接の五段階に関する研究成果をもとに，主に原因・理由，条件，逆接の 3 種類の副詞節について，世界各地の約 30 の言語における，副詞節と主節の結びつきを研究している。

Abstract: There are restrictions on the combination of an adverbial clause with a main clause. It may or may not be possible to combine them, depending on their semantic and pragmatic nature. The relationships between an adverbial clause and a main clause can be divided into five types, which are termed the 'five levels in clause linkage'. On the basis of the research on the five levels in clause linkage in Japanese, the present collaborative research project investigates the combinatory possibilities of adverbial clauses — mainly causal, conditional, and adversative clauses — and main clauses in close to 30 languages of the world.

1. はじめに

日本語で，原因・理由を表す接続表現に「から」,「ので」,「ために」（又は「ため」）などがある。例文を見よう。

(1)　雨が降ったから，試合が中止になった。
(2)　雨が降ったので，試合が中止になった。
(3)　雨が降ったために，試合が中止になった。

これらの例文を見る限り，「から」,「ので」,「ために」は全く同じ文で使える。用法に違いは無いように見える。しかし，実は違いがある。しかも，様々な違いがある。重要な違いの一つは，主節にどのようなものが現れるかである。

(4)，(5)，(6) を比べてみよう。

(4)　雨がやんだから，出かけよう。
(5)　?雨がやんだので，出かけよう。
(6)　*雨がやんだために，出かけよう。

(4)，(5)，(6) では，主節は聞き手への働きかけを表す。この場合，(4)「から」は問題無く言える。(5)「ので」は，少なくとも私の内省ではやや言いにくい。(言いにくい文は疑問符 (?) で示す。) (6)「ために」は言えない。(言えない文は星印 (*) で示す。)

(1)，(2)，(3) では，副詞節は原因・理由 (「雨が降った」) を表し，主節は結果 (「試合が中止になった」) を表す。いわば，単純な「原因・理由⇒結果」の関係を表す。(4)，(5)，(6) も「原因・理由⇒結果」の関係を表す。しかし，この「原因・理由⇒結果」の関係は，(1)，(2)，(3) の場合と違って，単純なものではない。主節は結果 (「出かける」) を表す。しかし，ただ結果を表すだけではない。結果に加えて，聞き手への働きかけ (「しよう」) も表す。

このように，「から」，「ので」，「ために」は，主節の種類を変えると，言えるものと，言えないものの違いが出てくる。

次に，(7)，(8)，(9) を比べてみよう。

(7)　ビールは冷蔵庫の中にあるよ。随分喉が渇いているようだから。
(8)　*ビールは冷蔵庫の中にあるよ。随分喉が渇いているようなので。
(9)　*ビールは冷蔵庫の中にあるよ。随分喉が渇いているようなために。

(7) は問題無く言える。(8) と (9) は，少なくとも私の内省では，言えない。(厳密に言うと，(8) の方が (9) より，許容度が少し高いと思う。)

意味の関係を見ると，(7) – (9) は (1) – (6) と違う。(1) – (6) では，副詞節は原因・理由を表し，主節は結果を表す。(更に，(4) – (6) では，主節は結果に加えて，聞き手への働きかけを表す。) (1) – (3) では，雨が降った結果，試合が中止になったのである。(4) では雨がやんだ結果，出かけようと働きかけたのである。

しかし，(7) の場合は違う。随分喉が渇いているようで，その結果，ビールが冷蔵庫にあるのではない。(7) の表す意味は，(10) のように言い換えることができる。もちろん，日本語としては不自然な文かもしれないが。

(10)　随分喉が渇いているようだから，ビールは冷蔵庫の中にある［と教えてあげます］よ。

「原因・理由⇒結果」の関係という観点から言うと，原因・理由を表す部分は「随分喉が渇いているようだ」であり，結果を表す部分は「教えてあげます」である。即ち，(7) では，(1) – (6) の場合とは違い，結果を表す節が隠れているのである。

ここまで見て来たことをまとめよう。「から」，「ので」，「ために」は全て原因・理由を表す。一見同じに見えるかもしれない。しかし，どのような主節と結びつくか，という観点では，大きな違いがある。

2. 副詞節の種類

第 1 節では，原因・理由を表す副詞節を見た。副詞節にはこのほか条件を表すもの，逆接を表すもの，目的を表すもの，様態を表すものなど，様々なものがある。本稿では，原因・

理由を表すもの，条件を表すもの，逆接を表すものを考察する。主に日本語を扱う。英語にも少し触れる。

日本語においては，これらの副詞節を示すマーカーには以下のようなものがある。

(a) 原因・理由：　から，ので，ために

(b) 条件：　と，ば，たら，なら

(c) 逆接：　ながら，にもかかわらず，のに，が，けれども

英語においては，これらの副詞節を示すマーカーには以下のようなものがある。

(a) 原因・理由：　because, as, since

(b) 条件：　if, in case, provided that

(c) 逆接：　although, even though, despite the fact that

3. 節連接の五段階

3.1 はじめに

角田三枝（2004）は，日本語の副詞節を考察して，副詞節と主節の結びつきについて，五つのレベルを分けることを提案した。具体的には，原因・理由を表す副詞節，条件を表す副詞節，逆接を表す副詞節の 3 種類を検討した。それぞれのレベルにおいて，主節又は副詞節が表す内容を以下に示す（角田三枝 2004: 27）。

レベル I：　主節：現象描写

レベル II：　主節：判断

レベル III：　主節：働きかけ

レベル IV：　副詞節：判断の根拠

レベル V：　副詞節：発話行為の前提

角田三枝（2004）に基づいて，この五つのレベルを紹介する。3.2 で原因・理由を表す副詞節を検討する。3.3 で原因・理由を表す副詞節，条件を表す副詞節，逆接を表す副詞節の，3 種類の副詞節を比較する。

実は，重要な先行研究が四つある。中右（1986, 1994a, 1994b）と Sweetser (1990) である。第 4 節で紹介する。

3.2 原因・理由を表す副詞節

日本語の，原因・理由を表す副詞節のマーカーには「から，ので，ために」などがある。五つのレベルによる使い分けは以下の通りである。（詳細は角田三枝（2004: 28–36）を参照されたい。）

［1］レベル I

3.1 で述べたように，レベル I では，主節の役割は現象描写である。判断（レベル II），働きかけ（レベル III）などの働きはない。副詞節が原因･理由を表す場合，主節は結果を表す。「から，ので，ために」は全て使える。例文を挙げる。

(11) = (1) 雨が降ったから，試合が中止になった。
(12) = (2) 雨が降ったので，試合が中止になった。
(13) = (3) 雨が降ったために，試合が中止になった。

［2］レベル II

レベル II では，主節は判断を表す。副詞節が原因・理由を表す場合，主節は結果を表す。結果に加えて, 判断も表す。「から, ので」は使える。「ために」は, やや不自然な場合がある。

(14)　父が入院したから，大学をやめて働くつもりだ。
(15)　父が入院したので，大学をやめて働くつもりだ。
(16) ?父が入院したために，大学をやめて働くつもりだ。（角田三枝 2004: 29）

結果を表す部分は「大学をやめて働く」であり，判断を表す部分は「つもりだ」である。

［3］レベル III

レベル III では，主節は働きかけを表す。副詞節が原因・理由を表す場合，主節は結果を表す。結果に加えて, 働きかけも表す。「から」を使える。「ので」はやや不自然である。「ために」は使えない。

(17) = (4)　雨がやんだから，出かけよう。
(18) = (5) ?雨がやんだので，出かけよう。
(19) = (6) *雨がやんだために，出かけよう。

結果を表す部分は「出かける」であり，働きかけを表す部分は「しよう」である。

副詞節が原因・理由を表す場合，レベル I からレベル III までは，主節は，副詞節が述べた出来事の結果を表す。（更に，主節は，レベル II では，結果に加えて，判断も表す。レベル III では，結果に加えて働きかけも表す。）即ち，副詞節と主節が「原因・理由⇒結果」の関係を示す。しかし，レベル IV とレベル V では状況が違う。副詞節と主節は「原因・理由⇒結果」の関係を示さない。

［4］レベル IV

レベル IV では，副詞節は判断の根拠を表す。副詞節が原因・理由を表す場合もその通りである。例文を見よう。

(20)　消防車が来たから，火事でもあったのだろう。
(21) ?消防車が来たので，火事でもあったのだろう。
(22) *消防車が来たために，火事でもあったのだろう。

（20）はレベル I からレベル III までの文とは違う。消防車が来た, その結果, 火事でもあったのだろうという意味ではない。即ち,「原因・理由⇒結果」を表しているのではない。消防車が来た，そのことを根拠に判断すると，火事でもあったのだろうという意味である。主

節が判断を表し，副詞節がその判断の根拠を示す。

「原因・理由⇒結果」の関係の観点から言えば，原因・理由を表す部分は「消防車が来た」である。結果を表す部分は「そのことを根拠に判断する」である。即ち，結果の部分が隠れているのである。

副詞節が判断の根拠を表す場合，(20)「から」は言える。(21)「ので」は，私の内省ではかなり不自然である。しかし，全く言えないとは断定できない。(22)「ために」は全く言えない。

［5］レベルⅤ

レベルⅤでは，副詞節は発話行為の前提を表す。副詞節が原因・理由を表す場合もその通りである。例文を見よう。

(23) = (7)　ビールは冷蔵庫の中にあるよ。随分喉が渇いているようだから。
(24) = (8) *ビールは冷蔵庫の中にあるよ。随分喉が渇いているようなので。
(25) = (9) *ビールは冷蔵庫の中にあるよ。随分喉が渇いているようなために。

(23) も，「原因・理由⇒結果」を表しているのではない。随分喉が渇いているようだ，その結果，ビールが冷蔵庫にあるという意味ではない。第1節で述べたように，(23) = (7) の表す意味は，(26) = (10) のように言い換えることができる。もちろん，日本語としては不自然な文かもしれないが。

(26) = (10) 随分喉が渇いているようだから, ビールは冷蔵庫の中にある［と教えてあげます］よ。

即ち，ビールは冷蔵庫の中にあると教えてあげる発話行為の前提を，副詞節が表している。

「原因・理由⇒結果」の関係という観点から言うと，原因・理由を表す部分は「随分喉が渇いているようだ」であり, 結果を表す部分は「教えてあげます」である。(23) = (7) でも，結果を表す節が隠れている。

(23)「から」は言える。(24)「ので」と (25)「ために」は言えない。

しかし,「ので」は，言える場合がある。例えば，敬語を用いた，丁寧度の高い文なら言える (角田三枝 2004: 30–31)。即ち, レベルⅤでは「ので」は条件付きで言える。例を挙げる。

(27)　今晩，お食事はどうなさいますか。花火大会がございますので。(角田三枝 2004: 31)

3.3 原因・理由，条件，逆接を表す副詞節のまとめ

3.2で，原因・理由を表す副詞節のうちの,「から，ので，ために」の意味と用法を検討した。第2節で述べたように，条件を表す副詞節のマーカーには「と，ば，たら，なら」などがある。逆接を表す副詞節のマーカーには「ながら，にもかかわらず，のに，が，けれども」などがある。これらの副詞節のマーカーについても，原因・理由の副詞節のマーカーの場合と同じように，五つのレベルによって，使い分けがある。詳細は角田三枝（2004: 36–66）を参照されたい。

角田三枝 (2004: 27) とその後の研究 (角田三枝, 私信) にもとづいて, これらの副詞節のマーカーの使用の可能性を表 1 に示す。

表 1　日本語における節連接の五段階

	I	II	III	IV	V
原因・理由					
ために	+	△	−	−	−
ので	+	+	△	△	△
から	+	+	+	+	+
条件					
と	+	△	△	△	△
ば	+	+	△	△	△
たら	+	+	+	△	△
なら	−	△	△	+	+
逆接					
ながら	+	+	△	−	△
にもかかわらず	+	△	−	−	−
のに	+	+	△	−	−
が，けれども	+	+	+	+	+

＋無条件に使える。
△やや不自然である，または，条件付きで使える。
－使えない。

表 1 が示すように，原因・理由を表す様々な副詞節は，五つのレベルによって使い分けている。条件を表す様々な副詞節も同様である。逆接を表す様々な副詞節も同様である。このように，副詞節と主節の関係について五つのレベルを分けることは，日本語の副詞節の意味と用法を理解するのに，有力な道具である。

4. 先行研究

中右（1986, 1994a, 1994b）と Sweetser (1990) は，角田三枝（2004）が提案した五つのレベルに密接に関連のある指摘，提案をしている。非常に大まかに言うと，以下のようにまとめることができる。

中右（1986, 1994a, 1994b）は以下の，副詞節のマーカーを考察した。

（a）英語：（i）原因・理由：since,（ii）条件：if, in case,（iii）逆接：though

（b）日本語：（i）条件：ば，たら，なら，（ii）逆接：が

中右は，これらの副詞節は，以下の三つの領域において用いることを指摘した。

（i）命題内容領域,（ii）命題認識領域,（iii）発話行為領域

Sweetser (1990) は以下の，副詞節のマーカーを考察した。

（a）英語：（i）原因・理由：because, since,（ii）条件：if,
（iii）逆接：although, despite the fact that

Sweetser (1990) は，これらの副詞節は，以下の三つの領域において用いることを指摘した。

（i）content domain,（ii）epistemic domain,（iii）speech-act domain

中右（1986, 1994a, 1994b），Sweetser (1990)，角田三枝（2004）の三人の提案した枠組みの対応関係を表 2 に示す。角田三枝（2004: 22）参照。

表 2　角田三枝（2004）と中右（1886, 1994a, 1994b）と Sweetser (1990) の比較

角田三枝	中右	Sweetser
I 現象	命題内容領域	content domain
II 判断	なし	なし
III 働きかけ	なし	なし
IV 判断の根拠	命題認識領域	epistemic domain
V 発話行為の前提	発話行為領域	speech-act domain

角田三枝（2004）の研究は，中右（1986, 1994a, 1994b）の研究と Sweetser (1990) の研究と比べて，少なくとも二つの点で違う。

［1］違い 1。中右の枠組みと Sweetser の枠組みには，角田三枝の枠組みのレベル II「判断」とレベル III「働きかけ」に相当するものが無い。

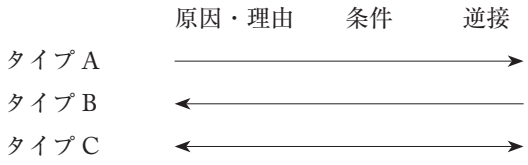
［2］違い 2。角田三枝 (2004: 27) は考察した副詞節マーカーの使用の分布図を示した。（上の表 1 に引用した。）しかし，中右も，Sweetser も，考察した副詞節マーカーの使用の分布図を示さなかった。角田三枝は，副詞節マーカーによって，使用の分布が違うことを明快に示した。中右はこのことを示さなかった。Sweetser (1990: 82, 155, 156) は，英語とフランス語について，副詞節マーカーによっては，分布が偏る場合があると述べている。しかし，副詞節マーカーの包括的な分布図は示さなかった。

5. 本共同研究における，今までの成果

本共同研究プロジェクトの研究発表会において，プロジェクトのメンバーが，今までに，30 近くの言語についての研究の成果を報告した。その結果，様々なことが明らかになって来た。諸言語に共通する傾向が見つかった。同時に，言語間で異なる点も見つかった。今までの成果の概略を報告する。

［1］副詞節のマーカーは全ての言語にある。しかし，それが多い言語（例：日本語と英語）と少ない言語（例：豪州のワロゴ語とジャル語）がある。

［2］原因・理由の副詞節と条件の副詞節と逆接の副詞節が存在するかどうか，存在する場合には，その副詞節の種類が多いか少ないかを見ると，大まかに言って，これら 3 種類の副詞節は，以下の順番に並べることができる。更に，諸言語は三つのタイプに分けることができる。



タイプ A の言語では，大まかに言って，副詞節の種類は，原因･理由を表すものが最も多く，次に条件を表すものが多い。逆接を表すものが最も少ない，または，存在しない。例は，ビルマ語，ワロゴ語（豪州），ジャル語（豪州）である。

タイプ B の言語では，状況はタイプ A の言語の逆である。大まかに言って，副詞節の種類は，原因・理由を表すものが，最も少ない，または，存在しない。次に条件を表すものが少ない。逆接を表すものが最も多い。例は，ダパ語（中国），ナーナイ語（シベリア），サハ語（シベリア）である。

タイプ C の言語では，これら 3 種類の副詞節のどれが多いか，少ないかを決めるのが困難である。日本語と英語はその例であろう。

König (1991: 192) は逆接の副詞節が存在しない言語があると指摘している。上記の分類で，タイプ A の言語に相当すると思われる。しかし，本共同研究プロジェクトでは，タイプ A の言語の逆の傾向を示す言語，即ち，タイプ B の言語が見つかった。

更に，König (1991: 192) は，幼児の言語習得について，逆接の副詞節の習得は遅いと述べている。大まかに言って，タイプ A の言語における副詞節の数の傾向と一致するようだ。では，タイプ B の言語においても，これら 3 種類の副詞節の中で，逆接を表す副詞節が最も多いのにもかかわらず，逆接の副詞節の習得は遅いのであろうか？大変興味深い問題である。

［3］第 4 節で述べたように，角田三枝 (2004) は，中右 (1986, 1994a, 1994b) と Sweetser (1990) とは違い，レベル II とレベル III を設定した。表 1 が示すように，日本語では，レベル I とは別に，レベル II とレベル III を設定する根拠がある。レベル II とレベル III を設定する根拠は，日本語の他に，ネク語（ニューカレドニア），ナーナイ語（シベリア），韓国語・朝鮮語，アバル語（コーカサス），ビルマ語，ヘレロ語（ナミビア，ボツワナ）などに見つかった。レベル II とレベル III を設定することが有効であることを示す。

［4］五つのレベルにおいて，副詞節によって，使用の分布が異なることがある。

(a) 殆ど全ての言語において，高いレベルに行くと，即ち，レベル IV とレベル V では，副詞節が使いにくくなる場合，あるいは，使えない場合がある。この傾向はかなり著しい。特に，豪州のワロゴ語とジャル語では，レベル IV とレベル V の例が見つかっていない。

(b) 逆に，レベル IV とレベル V での方が使いやすいものもある。例は日本語の「なら」と英語の since である。

(c) 更に，諸言語に共通した傾向を指摘するのが困難な場合もある。

以上，本共同研究プロジェクトの今までの成果の概略を述べた。今後の課題は以下の通りである。

課題：節連接の五段階について

上記の（c）の場合，即ち，諸言語に共通した傾向を指摘するのが困難な場合について，できる限り，傾向を見つけること。

以下の二つのテーマは，諸言語における節連接の五段階を調査する過程で浮かび上がったものである。本共同研究プロジェクトの当初の計画の範囲を超えるテーマであり，本共同研

究プロジェクトで研究することは困難ではあるが，大変興味深いテーマである。

テーマ 1：タイプ A，タイプ B，タイプ C について

上で見たように，3 種類の副詞節が存在するかどうか，存在する場合には，その副詞節の種類が多いか，少ないかによって，諸言語は三つのタイプに分けることができる。このタイプの違いがその言語の他の特徴と関連があるか，無いかは興味深い。

テーマ 2：副詞節の習得について

3 種類の副詞節の中で逆接の副詞節の種類が最も多い言語において，逆接の副詞節の習得は遅いか，あるいは，早いかも，興味深い。

以上述べたように，諸言語における節連接の五段階について，様々な事実が見つかった。更に，この研究を通して，興味深いテーマも見つかった。今後の研究に期待したい。

参 照 文 献

König, Ekkehard (1991) Concessive relations as the dual of causal relations. In: D. Zaefferer (ed.) *Semantic universals and universal semantics*, 190–209. Berlin and New York: Foris.

中右実（1986）「英語における文の連接」『日本語学』5(10): 76–85.

中右実（1994a）『認知意味論の原理』東京：大修館 .

中右実（1994b）「日英条件表現の対照」『日本語学』13(9): 42–51.

Sweetser, Eve (1990) *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

角田三枝（2004）『日本語の節・文の連接とモダリティ』東京：くろしお出版 .

角田　太作（つのだ・たさく）

国立国語研究所言語対照研究系教授。Ph.D.（言語学）（Monash 大学）。Griffith 大学講師，名古屋大学助教授, 筑波大学教授, 東京大学大学院教授を経て, 2009 年 10 月より現職。James Cook 大学特任教授。

主な著書・論文：*The Djaru language of Kimberley, Western Australia* (Pacific Linguistics, Australian National University, 1981), Split case-marking patterns in verb-types and tense/aspect/mood (*Linguistics* 19, 1981),『世界の言語と日本語』（くろしお出版，1991（改訂版 2009））, *Language endangerment and language revitalization* (Mouton de Gruyter, 2005 (Paperback 2006)), *A grammar of Warrongo* (De Gruyter Mouton, 2011).

社会活動：*Linguistics* (Mouton de Gruyter) 査読委員，*Studies in Language* (John Benjamins) 査読委員，Pacific Linguistics 編集顧問委員，Association for Linguistic Typology 人選委員会委員長，Linguapax 顧問委員，日本言語学会評議員，Warrongo 語（豪州東北部）の復活運動に協力.

基幹型共同研究プロジェクト「節連接へのモーダル的・発話行為的な制限」

プロジェクトリーダー　角田太作（国立国語研究所　言語対照研究系　教授）

プロジェクトの概要

副詞節と主節の結びつきの可能性に基づいて，五つのレベルを設定できる。これを「節連接の五段階」と呼ぶ。本共同研究プロジェクトでは，日本語における節連接の五段階に関する研究成果をもとに，主に原因･理由，条件，逆接の 3 種類の副詞節について，世界各地の約 30 の言語における，副詞節と主節の結びつきを研究している。

節連接の五段階における，これら 3 種類の副詞節の用法には，諸言語に共通するある種の傾向が見つかった。更に，この研究を通して，原因・理由の副詞節が最も多い言語，逆接の副詞節が多い言語というタイプの違いも見つかった。このタイプの違いと習得の順番の違いの関係は何か，という興味深い問題が現れたが，これは今後の研究に期待したい。